



集落支援員 じゅっちゃんの ALOHA! 五城目町。

五城目町の皆様、Alo-ha! 集落支援員の八嶋美恵子です。森山も美しく色づき、秋も真っ盛りです。わたしは朝市できのこ出汁の取り方を教わったり、栗ごはんをお裾分けいただいたりと、お陰様で季節を感じています。

10月は新築の五城目小学校にて、ドイツ在住・仙台/福島ご出身の演奏家ご夫妻によるヴァイオリン・ヴィオラコンサートを開催しました。会場まで足をお運びくださり、心から感謝申し上げます。

青空の下、楽器の音色がよく響く高い天井、ガラスと杉の木がふんだんに活かされた開放的な階段教室に若男女、計約80名が集って約2時間の公演を楽しみました。

アンコールでは秋田出身成田為三氏作曲の『浜辺の歌』と、バッハの『主よ人の望みの喜びよ』を滑らかにつなげたメドレーを演奏してくださり、感動で、とても癒されました。(豆知識：秋田内陸縦貫鉄道 米内沢駅では、列車の到着を告げるメロディに『浜辺の歌』が使われているようです。ぜひ聞いてみたいです!)

今回「新しい小学校に初めて訪れた」という方も沢山いらしたようです。「校舎の境界を越えて子どもたちが地域に飛び出す一越える学校」として開校されてから約2年。学校が、今後ますます子どもと大人が自然に行き交う場になっていくイメージを抱くことができました。

さて、そんな小学校を舞台に先月から『みんなの学校』という取り組みが始まっています。小学校の授業を一般公開して子どもたちと共に学べるもの、町の人が講師となって様々なテーマ(エネルギー、ICT、健康など)を深めるもの、全23講座が開かれています。

お申込みは「みんなの学校」ホームページからできます。また、パソコンやスマートフォンからのお申し込みが難しい場合には、教育委員会生涯学習課(☎018・852・4411)でも受付可能とのこと。わたしもこの機会に、興味のあるものにチャレンジしてみます^^



五高 NEWS 創立80周年

五城目高校のわだいを定期的にお届けします!



急坂をロープにつかまり登る生徒たち



頂上でのつかの間の休息

80周年記念森山登山に参加して

～どんぐりころころどんぐりこ～

私は「昨年も登ったから大丈夫だろう」と、調子に乗っていましたが、登り始めて10分もすると疲れが出て足が痛くなり始め、無事に頂上まで登り切れるのか不安でした。先頭を歩いていましたが、次々とみんなに先を越されてしまいます。そんな中でも、他の人のペースに合わせることなく、自分のペースで楽しみながら登ることができました。

頂上からの景色は、疲れを忘れるくらいきれいでした。登り終わった後は

達成感をとても感じ、思い出に残る写真も撮ることができて良かったです。

今回の森山登山では、森山の自然を体感することができ、とても良い体験となりました。森山に登ったことを誇りにし、来年も登るのが楽しみです。また、森山はとても素敵な場所ですので、家族や知り合いにオススメしようと思います。

森山がもっとと盛り上がってくるといいなと感じました。

(2年 猿田真由美)

11月の主な行事予定

1日(火) 修学旅行(2年)(4日まで)	16日(水) 生徒会役員改選
5日(土) 県総合美術展(アトリオン、9日まで)	25日(金) バスケットボール中央地区新人戦(27日まで)

五城目高校ホームページ：<http://www.gojome-h.akita-pref.ed.jp/>

ふるさとを想う

ふるさとを旅して思うこと

荒川 満(昭辰町出身)

実家を離れ40年以上になります。若い時はあまり意識しませんでした。若くして、生まれ育った故郷にはやはり特別な思いがあるものだなとこの頃になってしみじみ思います。

自分が小さいころの五城目は、子どもの数も多く、商店の数もそれなりにあって子どもの目には活気が感じられました。下町で開催された神明社の祭りや七夕、盆踊りなどには、人が大勢集まってとても賑やかだったのを覚えています。

帰ってきています。特に子どもが小さいときには、5月の連休、夏休み、冬休みと年3回以上は帰省していました。そのおかげか、子どもたちも五城目を第二のふるさととして思っているようで、親としてありがたいことだと思えます。

子どもたちが自立してからは、夫婦での帰省が多いですが、時間に余裕があれば町内のいろんなところへ出かけます。朝市があればまず行きま

す(家内は必ず何かしら買い物を買います)。何か目新しいところ、興味を惹かれる場所があれば行ってチェックします。また、自分ひとりで町内をブラブラして昔遊んだ場所や同級生の家を見つかったりして昔を懐かしんだりもします。天気

が良ければ、馬場目や杉沢、内川方面へも車で行きます。同じところへ何度も出かけることにもなりますが、町内を旅するといろんな発見があるのも楽しみです。



残念ながらここ2年ほどは、コロナ禍で帰省も日帰りとなって実家でゆっくりすることもできませんが、また子どもや孫たちを連れて五城目に帰ってきたいと思っています。

会社を退職後、昨年から自宅近くの児童館で学童保育の仕事をしています。軽い気持ちで勤めたものの、子ども相手に悪戦苦闘の毎日です。保育士を定年まで勤め上げた同級生がいますが、「アッパレ」だなど心から思います。今の子どもたちを見て感じるのには、管理され過ぎていること、地域との結びつきが薄いこと、が仕事との両立で疲れて見えます。近所のおじさんのひとりとして、子どもたちがのびのび育っていきける地域づくりを協力していきたいと思っています。

仙台で地元新聞に五城目に関する記事が掲載されることになったり、町外から若い人が移住したり五城目で起業したりしているという記事も掲載されています。昔とは違った形で町に活気が出て、子どもの数が増えてきたら元町民としては嬉しいかぎりです。

ごじょうめの文芸



「短歌」

口笛は若き日のもの口笛を吹きつつ青年校門を出づ

大川 小熊 正明

耳鳴りの音によく似た虫の声夜の静寂に秋を告げている

西磯ノ目 小玉 明子

彼岸過ぎ夏の終りと鳴く蟬の声を細かり夕日に溶けゆく

岡本 大石 政子

「俳句」

群落と言へどさみしき糸すすき

昭辰町 本間 富子

歴史的女王悼む秋の虹

畑町 本間 恵子

父母の遺影につこり盆用意

高崎 館岡 絢

「川柳」

予告なく来る災害に手も出せず

脇村 伊藤 千里

それぞれの居場所を繋ぐ交差点

広ヶ野 佐々木 涼弥

迷いない一歩になった快復期

矢場崎 鈴木 さくら

紙一重 猪口の軽い日重たい日

新里町 加藤 円心